

# ああ、相談業務

～ 緑さんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

13

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

子育ての相談を受けていると度々聞くのが、我が子をかわいいと思えないという話である。生まれてすぐの赤ちゃんは確かに、小さくて弱弱しくて、赤黒い感じで、あまりかわいいというイメージではないが、ちょっと時間がたつとかわいらしくなってくる。初めての子育ては必死で、かわいいと思う間もないかもしれない。そんな新米母親に、「かわいいでしょう？」などという言葉は、そう思えないためにダメな母親だと責められているように感じてしまう。

今回は、我が子をかわいいと思えない母親の話である。

## 家族

緑さんは24歳。スナックで働いていた時に、今の夫、卓也さん36歳と知り合い結婚した。

卓也さんは、若い会社経営をしていて、かなり金銭的にはゆとりのある人である。結婚してすぐ妊娠。真帆ちゃんを出産。真帆ちゃんは今2歳である。

緑さんの実家は、母親40歳、弟16歳（高校2年）、妹12歳（中学1年）の母子家庭で、母親はスナックの雇われママをしている。母方祖母（60歳）は母方叔父（38歳）とともに近くに住んでいて、パートでスーパーに努めている。祖母も母親も母子家庭で、祖母と祖父は離婚、母親と父親とは未入籍で、緑さんは父親に会ったこともない。母方曾祖母（85歳）もまだ健在で、祖母の兄（65歳）一家と東北で暮らしている。曾祖母にとって真帆ちゃんは第一号の玄孫である。若くして子を産んでいるため、玄孫までも見られるのは幸せな曾祖母だろう。曾祖父は10年位前に亡くなっている。

## 相談の始まり

緑さん（以下彼女）とは、1歳半健診事後の発達相談で出会った。1歳半健診で、言語発達が気になったため、保健師が半年後の確認としたのである。言語発達が気になるケースとは、健診場面ではっきりとした言葉が聞かれない、「〇〇はどれ？」などに対しての指差しが無い、か曖昧など、言語理解や発語などに問題がある場合、或いは、かなり遅れが顕著だが、保護者が「家では話す、指差しも間違いない」などと言って、遅れを認めるのが難しそうな場合に半年後の様子確認で引っ張っていく場合とがある。それ以外に半年後の再検査とするケースは、母子関係が気になる場合である。母子関係が気になっても、母親の問題として再検査につなぐとは言えないので、保健師や我々発達相談に関わる者は、何とか別の理由をこじつけて再検査に引っ張ることもある。この母親の場合は、後者が主であったが、言語発達にも少々気になるところがあり、発達相談となった。

発達相談の日、母子で来室した。彼女は髪は金髪できれいに化粧をし、ほっそりとした体形が良くわかる、ミニスカートに胸の大きく開いたシャツで、見た目に水商売かなと思わせるような、やや派手目の服装であった。一方真帆ちゃん（以下本児）は、女の子だが、彼女とは対照的に地味な紺とグレーの上下で、一瞬男の子かと思うような服装。髪型は短髪で表情も少ない子だった。

## 相談経過

発達相談では、児の発達検査をする一方で、保護者に、家族のことはじめ、児の家での様子、遊びや関わり方、食生活や睡眠などについて聞いていく。特に、筆者は家族療法を学んで

いる関係で、家族については初回に念入りに聴いている。母子家系というか、代々母子という家族は度々見かけるし、若くして母親になるのも、代々ということがある。

彼女は、弟や妹とは父親が異なるそうで、実母は16歳の時に、同じ高校の同級生との間に彼女を設け、弟は別の男性との間で生まれ、更に妹もまた別の男性との間に生まれたという。弟が生まれた時、彼女は8歳である。小学校3年生になったところだったそうだ。赤ちゃんは可愛かったが、実母が付き合っていた男性は嫌いだった。実母はいつもきれいに着飾っていたが、子どもたちにはあまり目を向けていなかった。8歳の子が弟の面倒を見ていた。実母は、夜の仕事をしていたので、近くに住んでいる母方祖母がご飯など家事をこなし、夜は寝るまでいてくれたが、実母がまだ帰らない夜中に赤ちゃんが起きると、仕方なくおむつを替えたり、ミルクを与えたりしていた。それが日課で、彼女は仕方がないと思っていたそうだ。今でいえばヤングケアラーである。

実母は男性関係が長続きせず、弟が生まれてすぐその男性とは別れた。というか逃げられた。これで男性には懲りたのかと思ったものの、また数年後に違う男性と付き合いをはじめ、妹が生まれることになった。妹が生まれた時、彼女はもう小学校卒業の時で、小学校の卒業式と中学校の入学式の日、実母も祖母も来てくれたのがうれしかったと話していた。

中学に入ってから、部活に入りたかったものの、弟や妹の面倒を見なければならないため、帰宅部となった。日中は保育園に行っていたので、実母が起きない時は、朝弟を保育園に送っていき、その足で学校へ。帰りは実母が迎えに行くことが多かったが時折彼女が迎えに行っていたそうだ。

1年ほど、まだ保育園に入れなかった妹だけは祖母宅で預かってもらっていた。学校が終わると祖母宅に行って妹を引き取り、家に帰って家事をするような生活になった。1年後には、

妹も保育園に入った。祖母は実母に対し、だらしがないとか、次々子どもを産むなとか、注意をするものの、実母は聞く耳を持たず、嫌なことを言われた腹いせを、彼女にするようになった。

家事はほとんど彼女がやることになっていて、学校から帰ると晩御飯の支度、洗濯や掃除、片付けが待っている。その間、実母は買い物と保育園に弟を迎えに行き、帰宅すると仕事に出る準備に入る。実母が買ってきたものを使って、晩御飯のメニューを考え、適当に料理をする。おかげで料理はある程度なんでもできるようになったと笑っていた。

実母が出かけた後は、弟妹の面倒を見ながら、宿題をやったり、勉強をしたりしたが、だんだんそれも面倒になり、宿題を忘れた時は学校を休むという形から、学校に行きにくくなっていった。中学校は1年だけ半分くらい行ったが、その後不登校になり、2、3年も修学旅行も行かなかったそうだ。家で家事、育児をすることで、実母からは学校に行けとは言われないものの、家事・育児については実母から叱責されることが多くなった。口答えをすれば叩かれることもあった。

そんな実母を嫌いつつも 弟妹が寝てからの夜中は、一人の時間を楽しむことが出来たそう。見たいテレビの録画を観たり、ゲームをしたり、漫画を読んだりしていた。

中学3年の時に、実母がまた別の男性と付き合い始め、その男性からいやらしい目で見られるようになり、ある時酔っぱらって抱きついてきたのに、実母が笑って止めもしなかったことをきっかけに、家を早く出たいと思うようになったそうだ。中学卒業と同時に家を飛び出し、年齢を偽って、水商売に入って自立したという。弟妹と離れるのは寂しかったが、あんな家にはいたくないという思いの方が強かった。祖母宅に行くことも考えたが、連れ戻されるだろうと思い、最初は友達の家泊まらせてもらったが、その後寮のある水商売の店に勤めるようにな

った。給料が高いところを目指したら、こうなってしまったという。

実母から離れることが出来たが、あれほど嫌っていた実母と同じような仕事に就いた自分が、大嫌いだったという。

夫である父親とは、水商売をしているお店で知り合ったそうだ。それまでに、他の男性たちとの間で妊娠・墮胎を三回ほどしたという。夫と知り合って、結婚となったときに、子どもは欲しくないと思っていたが、夫がどうしても欲しいというので仕方なく本児を産んだそうだ。夫はもう一人ほしいというが、本児のことがかわいと思えないのもう一人など無理だという。そして、母親として、本児を可愛いとは思えない自分を責めていた。夫が本児をかわいがるのを見ていると、無性に腹が立ち、あとで本児をつねったりして泣かすことがあった。嫉妬である。頭では、「自分が生んだ赤ん坊に嫉妬しているなんておかしい」とわかっていても、止められなかった。

この長い話を、相談で聞きながら、彼女自身の育ちに問題があることは明白であったので、まずは、よく頑張って生き抜いてきたことをほめることから始めた。

祖母が手伝ってくれたとはいえ、わずか8歳から、下の子の面倒を見て、そうしないと認められない家で育った彼女は、実母から可愛がられた記憶がほとんどなく、唯一の記憶が小学校の卒業式と中学校の入学式に実母が来てくれたことである。実母との愛着関係がしっかり築けていないのだ。実母は子どものことより、男性に走り、家のことは祖母と彼女に任せっきり。加えて、実母の彼氏が抱きついたりすることを止めることもできない。実際に強制的に性的関係を持たされたのかどうかについては、言葉を濁したので、おそらくそういうこともあったのだろうと思われた。

家から出て、自立してきたことを認め、何度も辛い気持ちを乗り越えてきたことを褒めていると、彼女は大量の涙を流し、最後は大泣き

になった。慌ててティッシュボックスを渡すと、次々と鼻をかみ、1ボックス使い切るほどであった。

夫には全部話したのかと聞いてみると、実母を嫌っていることは伝えているが、どんなことがあったかまでは話していないという。彼女が優しい夫に出会ったことは、今まで頑張ってきたことへの、最大のご褒美なのではないか、本児も、言葉の発達は心配するほどではないし、ちゃんと育っていると思うと伝えていくと、少しほっとした様子になった。今までここまで泣いたことはないとも話していた。大泣きすることもできないほど、我慢に我慢を繰り返してきた彼女への労いを繰り返した。そして、過去のトラウマの処理をし、過去ではなく、未来に向かってどう生きていきたいか、という話になっていった。

本児については、母親への愛着がやや弱いものの、困ったときの安全基地としての役割が果たせていると伝えると、母親もほっとしたようで、本児をしっかり抱きしめて、「ごめんね」と言っていた。

発達相談に来てもらったのが、本児が2歳になったときで、その半年後に私設事務所のかかしの方に来てもらった。勿論無料相談である。1年後、母親は、化粧も自然な感じになり、服もごく一般的な、若いお母さんらしい格好になっていて、本児は髪を伸ばし、可愛く結って、服もかわいらしいピンク基調の花柄のスカートとシャツであった。

母子ともに表情もよく、本児の言語面も格段に伸び、順調であったので、終了となった。

## まとめ

実母との関係が悪いケースが結構多い。子どもを産むとき、産後の扱いを実母に頼むことが出来ると良いのだが、実母とは一切関わりたくないと言うのだ。義理の父母にお願いできる関

係性がある場合は良いが、それも難しいとなると、初めての子育てへの支援は、行政が行っているサポートのように、子育て支援センターの活用や、母子あるいは母子分離で一泊泊ったり、家庭にサポーターが行って手伝ったり等が考えられる。今でこそ、こういったサービスが出来てきたが、以前はこんなものもない。

初めて母親となったとき、自分自身がどのように育てられたかが、子育てに潜在的に影響を及ぼす。母子関係に亀裂があると、母親として我が子に関わる時に、またそこに亀裂が生じることがある。本ケースはその一例である。

だれにも自分の辛さを話せず、ひたすら耐えていた時代を振り返り、労い、収めてあげることが、母親として前を向いて生きていくうえでとても重要になる。

昨今ヤングケアラーの問題が大きく取り上げられるようになった。子どもたちが当たり前のように、弟妹の世話をし、精神や身体に障害を抱えた保護者の世話をし、貧困にあえぎ、学業や部活動、やりたいことを頑張ることが出来ないのは悲しいことである。しかし、日本の文化というか、家族で支え合うのは当たり前という考えのもと、ヤングケアラーであることの問題性はあまり認識されていない。そんなことはずっと前から言われていたことで、今に始まったことではない。

本ケースは、実母自体、離婚家庭で育ち、弟の面倒を見て育ったのではないかと思われ、長女であるだけで、家事・育児といったことを担わされてきたのだろう。だから、緑さんが家事・育児に時間を取られても、当たり前だったのだ。

次々と男を変えていく実母も、また寂しい人だと思う。どこでこの愛着形成不全の連鎖を断つか。目の前の母子を救うことから始めなければならぬだろう。

父母の離婚に巻き込まれて辛い時間を過ごす子どもたちがいる。父子家庭では長子が家事・育児をするのは当たり前になっている。最近では子を置いて出ていく母親も増えている。

子どもたちは何のために生まれてきたのか、自分の存在価値は何なのだろう、そんな悩みを抱えながら思春期を送る。十代の自殺者が、年間500人を超える今の時代、こども家庭庁は何をしてくれるのだろうか？母親たちが無料でカウンセリングを受けられるようにすると、教育の無料化はもちろん、保育園の充実、ヘルパー活用の充実、レスパイト・ケア（注）の充実など、やるべきことは沢山ある。そしてそうした支援に携わる人たちへの支援も大事である。限られた予算の中で、お金をばらまくのではなく、もっともっと現実に則した支援を政府主導で行ってもらわねば、子どもたちを救えないし、子どもは増えないだろう。

本ケースは、母親が抱え込んでいた闇を吐き出すことで、そして認められることで回復し、母子関係が改善された、いわばうまくいった例である。虐待にあった人は、人を信じることに抵抗がある。自分の闇を吐き出すことにも抵抗がある。本当の物語を聞き取ることが出来るか

否か、そこには、他人に対し拒否感を持つ人とどう関係性を築き、心を開かせるかという支援者側の問題がある。どんなことでも受け止められる器の大きさと、共感力、相談者にとっての安心・安全感の提供がキーになるだろう。受け止め、認め、褒めること、これが基本なのだ。

**注：レスパイト・ケア**・・・レスパイトとは一時的  
中断、延期、小休止などを意味する。レスパイト・  
ケアは乳幼児や障害者（児）、高齢者などを介護（育  
児）している家族に支援者が一時的に介護（育児）  
を代替し、リフレッシュしてもらおうサービスのこと。